九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「ポリモルフィア」創刊10 年目を迎えて

上瀧，恵里子
九州大学男女共同参画推進室 ： 教授

青木，玲子
公正取引委員会 ： 委員

武内，真美子
愛知学院大学経済学部 ： 教授

山下，亜紀子
九州大学大学院人間環境学研究院 ： 准教授

https://hdl.handle.net/2324/7347451

出版情報：ポリモルフィア. 10, pp.22-33, 2025-03-21. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

寄稿　創刊時の思い出と今後に向けての期待

山下亜紀子
九州大学大学院人間環境学研究院 准教授
（創刊号 特集イベント 登壇者）

ポリモルフィア創刊号には、特集として「科学と教育分野及び労働市場における女性の参画拡大を科学する」と題したワークショップのことが掲載されています。2015年11月16日に開催されたもので、私は、そのワークショップにパネル討論者として参加いたしました。九州大学に着任したのは、2014年4月でしたので来たばかりの時期でした。また、女性研究者を増やすという文部科学省の政策のなかで、九州大学は最先端のフロンティアとして頑張っておられる、という評判を前任校で聞いていましたので、男女共同参画推進室からお話をいただいたときには、とても嬉しかったのを記憶しています。

そのワークショップは、科学、教育、労働市場への女性の参画、ということが掲げられており、パブリックな（公的）領域への参画が基本テーマであったと思います。いわば、フェミニズムの当初の基本路線と同じ方向性であり、王道の部分をとりあげたものでした。かたや私は、プライベートの（私的な）領域の問題に関心があり、研究を進めていました。家族社会学、福祉社会学、地域社会学の立場から、発達障害児の母親のことについて研究を進めており、私的な領域にケアする人々が囲い込まれ、様々な生活困難が生じている、という点に問題意識を持っていました。そうしたことをふまえると、このワークショップでは、公的な領域の問題にとどまらず、私的な領域の問題も含めて議論される、ということになり、よく練られた企画であることを感じました。実際のワークショップの場では、同時通訳がつく国際的な議

2015年11月14日　ワークショップの模様（ポリモルフィア Vol.1　p.18, p.30）

論の場でもあり、その面でも刺激をいただきましたが、私からは私的な領域の問題提起をさせていただき、とても有意義な時間をもつことができました。

このワークショップの後も、男女共同参画推進室とは、様々なおつきあいが続いています。研究者支援に関する業務に関わらせていただいたり、また現在は男女共同参画推進室の協力教員としての関わりをもたせていただいたりしています。

最近は、ちょっとしたことではありますが、ジェンダー平等へ向けた貢献が私なりにできたのではないか、と感じることがありました。それは、研究者支援事業の審査にあたっての選考基準についてでした。当初案においては、「育児などを助けてくれる家族がいるかどうか？」といった家族の状況が、支援をするかどうかの選考基準に含まれていたのですが、これは、家族をケアラーとしてアプリオリに措定することにつながるので、フォーマルなサービスの利用実態のみを選考基準にいれたらどうか、というご提案をいたしました。委員会の先生方が理解、共感をしてくださり、そうした方向性が実現したことがありました。研究者支援の実践へ向け、これまで学んできたことや研究の知見が活かされたことは、大きな喜びでした。この10年で、九州大学では、ずいぶんと女性研究者も増え、研究環境も整ってきたのではないかと思います。これもひとえに、本学の男女共同参画推進室にフロンティアとしてひっぱっていただいたからだと思います。

最後に今後の男女共同参画推進室に対する希望にも触れておきたいと思います。先日、あるジャーナリストのお話を聞く機会がありました。その方は、「嫁」、「奥さん」という用語が望ましくない根拠として、対になる用語がないから、という点をあげておられました。この説明は私たちにパートナーがいることを前提視しているものではないか、と疑問をもち、そのジャーナリストにはバイアスがあるように感じました。「嫁」、「奥さん」については、権力性を孕むものとして、用いることは望ましくない、という根拠の方が妥当ではないでしょうか。その方のように、私も含め、私たちは、未だ様々なバイアスをもっていることがあります。一方で、ジェンダーやセクシュアリティに関する研究は進み、様々なバイアスを相対化してくれる視点を教えてくれています。私たちは様々に自分の道を歩んでいきます。すべての人々が研究や教育をしやすい基盤を、本学男女共同参画推進室には、フロンティアとして、作っていただきたいと願っています。

（挿入図等は編集委員会による）